

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

村山智順師の謎 (資料と情報)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005846

村山智順師の謎

朝倉敏夫



新潟、妙広寺の庭にて
(昭和31、2年頃)

村山智順とは誰であろうか？ おそらく朝鮮半島の文化、ことに民間信仰を研究する人なら、知らない人はいだらう。しかし、彼を知らない人のために、ここでは

『文化人類学事典』（弘文堂）の「村山智順」の項を引用しておこう。⁽¹⁾

生没年不詳 宗教学者。朝鮮総督府官房文書課嘱託として一九二四年から四一年まで総督府によって行われた調査事業に従事した。当時その前歴は警察署長であったという風聞があるだけで経歴は不明。この調査は村山の他に今村頼、高橋享、善生永助、吳晴、李能和らに嘱託されたもので、善生がおもに朝鮮の社会と民俗に関する調査を行ったのに対して、村山は「朝鮮人の思想を了解するには民間信仰から出発するのが順当であり自然である」として民間信仰の調査と研究に力を注いだ。朝鮮総督府調査資料四七輯のうち村山がまとめたのは『朝鮮の群衆』（一九二六年）をはじめ『朝鮮人の思想と性格』（一九二七年）、『朝鮮の類似宗教』（一九三五年）、『朝鮮の郷土娛樂』（一九四一年）など一〇輯にのぼる。これらは総督府の調査事業の一端ではあるが、実地調査資料の報告であると同時に、宗教学者村山個人の画期的な労作であり、研究業績であるといえる。いずれも大部な著述であり、一九二〇〜三〇年代の朝鮮の民間信仰全般にわたる貴重な調査研究報告である。

村山智順の名は、韓国の民俗学研究者の間でももちろんよく知られている。その著作の多くは翻訳されており、ことに『朝鮮の風水』は、おりからの風水ブームもあって、学術書としては異例な一万五〇〇〇部以上の売れ行きを示した。しかしながら、韓国の民俗学者たちのほとんどは、村山の研究に対してではなく当時の日本人の研究すべてに通じることであるが、その研究目的が日本の植民地政策のためにあり、研究方法が官憲によるものであったと、批判・否定している。

その一つの例をあげてみよう。韓国のシャマニズム研究の重鎮である金泰坤は「日帝が実施した朝鮮民間信仰調査資料の問題点」[『石宙善教授回甲記念民俗学論叢』一九七二]で、次のように村山を評している。

民間信仰第一部『朝鮮の鬼神』が朝鮮総督府調査資料第二五輯として一九二八年に出刊されたが、日帝がこの調査資料に着手したのは一九一九年三・一運動以後絶え間無く続けて起こる民族独立運動に衝撃を受け、韓国人の民族魂を完全に根から引き抜いてしまおうという意図から民間信仰の調査研究に着手したものとみられる。こうした意味であったとした

ら、朝鮮人の思想を了解するのに民間信仰の調査研究から出発しなければならぬとする村山智順の見解が的中したのである。民間信仰の中に民族の精神が流れていることを知った村山智順は単純な行政官吏や学者としてのみではなく、多年間植民統治行政の経験を土台としたその結晶が、このような民間信仰調査研究の案を計画させたものとみられる。該調査資料に依ると村山が「朝鮮総督府囑託」ということの外に、彼についての人的事項がまだ公式的に知られておらず、彼がどのような過程を経てこの地位にいるようになったのか、また彼がどのような秘密身分をもってこの仕事をしていったのか知るべき道がない。当時民俗学に関心をもっていた老学者たちから聞いた言葉に依れば、村山は多年間大邱警察部長を歴任し、朝鮮総督府に起用されたという言もあるが、この言葉を全的に信じることはできない。ともあれ村山は当時朝鮮事情に敏感な諜者の官吏であったことは間違いない。そうでありながらも彼はまた広く深い学問的与件まで兼備した天才的頭脳の所有者であったとみられ、また彼のこうした力量は充分に朝鮮の民族精神を知的に暗暗裏に抹殺させる先駆役として活用されたことであり、彼が裏面でどんな仕事をどのようにしたのかは誰も知ることは出来ない。なんら無辜な朝鮮

の独立闘士が、彼の知的計略に数知れず犠牲になったかもしれないのである。

はたして村山智順は、どのような人物であつたのだろうか？ その研究は植民地政策のためのものであつたのか？ だとすれば、彼の研究がどのように植民地政策に反映されたのであろうか？

村山智順については、さまざまな謎につつまれている。私は村山のそうした多くの謎に関心をもっているが、彼の研究についての謎の解明は後日に譲ることとして、ここではその「経歴は不明」「人的事項がまだ公式的に知られておらず」という謎、すなわち村山智順その人の生い立ちについて調べたことのみを報告することにした。

村山智順は、明治二四（一八九一）年五月七日、新潟県刈羽郡北条で生まれた。九番目の子として生まれたが一〇才にならないうちに母が亡くなり、日蓮宗法布山妙広寺に入り、そこで育つ。この妙広寺の住職が村山智全である。智全については、「慶応三年（一八六七）六月二五日北魚沼郡小千谷町丸山忠蔵の二男として生まれ、明

治九年旧広田妙広寺二八世住職純那院日章の許で得度、一二（一八七九）年一月二〇日大広田、村山重工門の養子となる。宗門の学林で学を極め、更に普通学、語学等に研鑽を進めて帰山、二八年三〇世妙広寺住職となつた。智全は、学徳共に勝れ、村民の尊敬のであつたが、昭和一八年二月二〇日七七歳でその生涯を閉じた」「北条町史」一九七二」という記録がある。

そして、これに続けて「村山智全は、明治二八年二月郷党有志と、同寺山内に創立を企画し、多くの寄付金を得て四恩報学舎という私立学舎を建てる。四恩とは、一に国王の恩、二に父母の恩、三に師の恩、四に一切同胞の恩をいい、この四恩報謝の道を学ぶことを本旨として、四恩報学舎と命名し、同年三月設立の趣意書並びに四二カ条から成る学舎の規則を制定、生徒を収容授業を開始した。寄付金募集に当たっては、住職の二〇円、村山七左エ門一二円、小黒喜重郎の一〇円などを筆頭に、五銭、二銭等の少額に至るまで、多数の賛同があつた」と記されている。

村山智順は、この四恩報学舎で薫陶をうけることになる。幼少のころから優秀であつた智順は、小学校には行



東京帝国大学学生時代

かず、東京の中学の二年に編入、一度故郷に戻り小千谷中学を卒業し、さらに一高、東大へと進学する。

東京帝国大学の学籍簿には、文学部哲学科社会学専修に大正五（一九一六）年に入學、大正八年七月卒業とあった。また、大正七年九月から大正八年七月までの社会学の講義要綱には、「建部教授の社会学原論、国体・国是と現時の思想問題、純正社会学及び教政学演習、小林講師の社会学史（コムトより現代諸家に至る）」とあった。さらに村山の卒業論文のタイトルは「日本国民性の発達」であることが分かったが「『東京大学文学部社会学科沿革七五年概観』一九五四」、あいにく論文は東京大学には

残されていなかった。

村山智順は、卒業とともに朝鮮総督府嘱託として朝鮮に渡る。朝鮮に渡った経緯は定かでないが、外遊したいという希望をもっていた時に、朝鮮にいた先輩と呼ばれたようである。ちなみに大正八年七月に村山と同時に同じ社会学専修を卒業した赤神良護は、同年九月から社会学研究室の助手となる。また、大正一五年に京城帝国大学に助教授として赴任する秋葉隆は、大正一〇年三月に卒業している。

朝鮮総督府における彼の研究業績は、次の表のようである。

表 村山智順業績一覧

- 大正一二（一九二三）年 「朝鮮社会制度史」「朝鮮史講座」
- 不明（大正一二・三年？） 「風水に就いて」「朝鮮史講座」
- 大正一三（一九二四）年 「朝鮮の独立思想及運動」「調査資料」¹⁰
- 大正一四（一九二五）年 「内鮮問題に対する朝鮮人の声」¹²
- 大正一五（一九二六）年 「朝鮮の群衆」¹⁶



京城の自宅で妻、長男、長女と（大正15年3月3日）
左から、お手伝いさんに抱かれた長女、妻、長男と本人。

昭和 二（一九二七）年 『朝鮮の服装』

昭和 二（一九二七）年 『朝鮮人の思想と性格』〔20〕

昭和 四（一九二九）年 『朝鮮の鬼神』〔25〕

昭和 六（一九三〇）年 『朝鮮の風水』〔31〕

昭和 七（一九三二）年 『朝鮮の巫覡』〔36〕

昭和 八（一九三三）年 『朝鮮の占トと予言』〔37〕

昭和 八（一九三三）年 『民間信仰と犯罪対策』、『朝鮮総覧』

昭和 一〇（一九三五）年 『朝鮮の類似宗教』〔42〕

昭和 一二（一九三七）年 『部落祭』〔44〕

昭和 一三（一九三八）年 『秋奠、祈雨、安宅』〔45〕

昭和 一六（一九四一）年 『朝鮮の郷土娯楽』〔呉晴〕〔47〕

未刊（昭和六年以降著述）『朝鮮市場の研究』^{〔3〕}

ここで注目するのは、当初は大学で専攻した社会学と結びつく社会思想に関心をいだいて調査を行っているが、昭和二（一九二六）年の『朝鮮の服装』以後、民俗学へと関心を移していることである。

村山の著作『朝鮮の鬼神』の「緒言」には、「朝鮮人の思想を了解するには民間信仰から出発するのが順当であ

り自然である」と書かれており、村山にとつては朝鮮人の思想を調べるという意味では、一貫していたのかもしれない。しかし、なぜ民俗学、ことに民間信仰に目を向けていったのかは、一つの謎である。あるいは幼少期に寺で育ったことと関係があったのかもしれない。

朝鮮での生活は、静岡県出身で一回り歳下の妻とともに京城の黄金町六丁目に暮らし、大正一三年に長男、大正一五年に長女をもうけている。黄金町での生活は、もっぱら自宅と総督府の往復であつたが、セブランス（現、延世大学）専門学校などで講義もしたようである。ふつうの公務員になると転勤が多いので、嘱託の仕事を選んだという。人につかわれることは好まなかつたようである。仕事で出張に出た後はいつも、家の一部屋を暗室にして撮ってきた写真の現像をしたり、写生をしてきたものだらう、本の中に使う挿し絵のようなものが机の上に置かれてあつたことを覚えていてと長女は語る。そうした忙しい仕事の中でも、休みを利用しては、長男を連れてよく登山や旅行に行ったりもしたという。長男は京城中学、長女は京城第一高女に通つた。京城帝国大学の秋葉隆の娘が、長男と同じ歳であり、長女の京城第一高女

の二年先輩でもあり、秋葉隆とは家族ぐるみのつきあひがあつたという。後年、博士学位のことで話が出たとき「秋葉さんがもう同じ様なことをされたから」と妻に話していたことがあるという。

昭和一六（一九四一）年三月、村山智順は日本に帰国する。日本に戻つては、高円寺に借家住まいをしながら朝鮮奨学会に勤務し、一七年に世田谷に移り住む。朝鮮奨学会は、もともと明治四四（一九一一）年六月朝鮮総督府が留学生規程を定め、東京に留学生監督をおいて取締にあたつたものが、昭和一六年に朝鮮奨学会に改組されたものである。朝鮮総督府の嘱託として勤務していた村山が、そのつてでいわば総督府の支所のような朝鮮奨学会に職を得たのは不思議ではない。

昭和一八（一九四三）年に師である村山智全が亡くなる。生前から智全や檀家に請われていた村山智順は身延山に行き修行をし、三世妙広寺住職として昭和二〇年に故郷北条に移り住む。智順は人に対して常におだやかに接し、檀家とのつながりも決して悪いものではなかつた。しかし、身体を患つて雪の深い北条から故郷に帰りたいという妻の強い要望もあり、昭和三三（一九五八）

年に東京に出ることにしたという。

村山智順は僧籍に入り学界からは身を引いた形になったが、生涯続けて読書に勤しんだようである。東京に転居した昭和三三年一〇月からつけ始めた雑記帖には、宗教関係ばかりでなく、社会学、民俗学に関する書物の読書ノートが綴られている。その一頁には「昭和三四年六月二八日久保田某氏を訪問して就職の件につき話す。予の朝鮮に於いて著述したものの名称を報告せられたしとのすすめに依り辞去して帰り、翌二九日著書を揃えて調べ、『朝鮮の鬼神』以下七部の書名を連ね書状とともに発送した。書名は『朝鮮の風水』『朝鮮の巫覡』『朝鮮の占卜』と予言』『朝鮮の類似宗教』『部落祭』『祭奠、祈雨、安宅』『朝鮮の娯楽』である。ページ数合わせて五三七ページである」と記されている。どこか大学の民俗学関係の講座への就職を考えていたのではないかと思われる。もしその希望が叶えられていれば、村山智順自身によりその学問が集大成され、その弟子たちによってそれについてのきちんとした評価がすでになされていたであろう。

「息女によれば、家族想いのやさしくて寡黙な父であつたという。たまに朝鮮時代の友人が話に来て、自ら

話すよりもほとんど聞き役であつた。昭和四三年九月一日、七七歳で村山智順師は永眠する。「歆喜院日完上人」として、その遺骨は故郷の妙広寺と、妻の故郷の近く富士霊園にまつられている。

注

(1) 『朝鮮人物事典』(一九九五、大和書房)にも村山智順の項目がある。ここには生年は記されているが、没年は不明となっている。

(2) 『朝鮮風俗集』など著述した今村軼が警察部長を歴任しており、それと錯覚したのではないかと思われる。

(3) 村山智順師の「息女のお宅で『朝鮮市場の研究』という未刊の著書を拝見した。この本を読んで、『内鮮問題に対する朝鮮人の声』も村山智順の著作であることがわかった。

(4) 姜徳相の著書の中に、村山智順の名が「東京直行組は奨学会村山智順主事」と連れ立ち、総督府東京事務所にて「『朝鮮人学徒出陣』一九九七・二三五」と記載されている。

謝辞

本稿を執筆するために、村山智順師のご息女である公仁子さんからお話をうかがった。ご息女がおられることは、上越市郷土史研究家の江口武正先生、村山和夫先生、妙広寺三世住職の竹岡智宣住職を通してうかがった。また、資料の収集に際し、本館情報サービス係の松原美重子さん、東京大学文学部教務掛の新妻智子さん、朝鮮奨学会図書係の曹貞烈さんなどに協力していただいた。記して感謝する。なお、本文中では敬称を省略した。

(第一研究部)

